

教育方針	1 心身の調和的発達を図り、健康で明るい人間を育てる。 2 地域社会との触れ合いを深め、情操豊かなたくましい人間を育てる。 3 社会生活や家庭生活に必要な態度や能力を養い、勤労を尊ぶ人間を育てる。 4 保護者・児童生徒からの要請に基づいた合理的配慮の提供に努力する。	重点目標	地域社会の未来を自分らしく生き抜く力の育成 － 瞳輝き、心つながる自己実現を目指して － ① コミュニケーション力 【伝える力(表現力)】自分の気持ちや考えを表現し、伝える力を育む 【感じる力(共感性)】相手の気持ちや思いを肌で感じる感性を育む ② 自己肯定力:達成感を積み重ねることで、自信を育む ③ 挑戦力:自ら主体的に考え行動し、根気強くチャレンジする力を育む ④ 生活力:社会の中で自立して豊かに生きていくための力を育む
------	--	------	---

領域	評価項目 (マニフェスト関連)	具体的目標	評価 (A～E)	目標の達成状況	次年度の改善方策
学 習 指 導	学習指導の充実 (分かる授業)	効果的な教材教具の作成や学習系Wi-Fiを利用した情報通信機器(パソコンやタブレット端末等)を効果的に活用して、児童生徒の発達段階に応じた指導方法を工夫し、授業改善に取り組む。	B	・アンケート結果では、教員の98.7%がB以上の評価をしている。保護者も77.8%がB以上の評価をしている。その中で小学部の保護者はB以上の評価が90.5%、中学部が78.1%、高等部が70.8%と学部が上がるにつれ、評価が下がっている。教職員は活用していると思っているものの、学部が上がるにつれ保護者にそれが伝わっていない現状がある。	・保護者全体のB以上の評価が80%を超えるように、保護者にどのように活用しているか伝える努力をする必要がある。特に高等部や中学部は伝え方を工夫する。
		分かる・できるが味わえる授業が実践できるように、授業における明確な目標、具体的な指導支援、自己理解につながる評価の一体化を図る。	B	・一人一人に合った指導や支援を行い、児童生徒の学習意欲を高めているという項目において、95.9%の保護者が、B以上の評価をしている。その中で、A評価をしている保護者の割合は、小学部90.5%、中が部75.0%、高等部43.8%であった。 ・小学部では学習内容表の作成に取り組んだ。段階に応じた児童が学ぶべき内容を教師が確認することで、個々に応じた目標や学習内容が明確になり、実践に生かすことで「分かる・できる喜びが味わえる授業」につながった。	・分かる・できるが味わえる授業の実践を継続し、日々の授業における児童生徒一人一人の目標を明確にし、具体的な指導支援や自己理解につながる評価を工夫していく。 ・日々の授業実践につながる指導内容・方法、教材等について具体的な情報提供を行う。 ・ICTの活用も含め、教材研究や授業の振り返りをする時間の確保が課題である。教材の共有や会議の効率化、個別の指導計画等の内容整理など、時間の確保に努めたい。
	専門性の向上 (専門性)	認定講習の受講促進や、特別支援教育に関する研修の積極的な情報提供を通して、専門性向上の機会を確保する。校内の教員の教育実践を見聞きする場を設定して、学校全体で共有することで、各教員のスキル向上を目指す。	B	・認定講習を受講した。研修の案内は積極的にに行い、参加を促した。学校全体で研究テーマを設定して取り組んだ。研究授業を各学年グループで一つ行い、すべての教員がビデオを視聴して研究協議を行った。それを基に部研で各自が行った授業について報告して意見交換を行い、授業改善につなげた。事例研究会では、小学部から高等部の縦割りで研修を行い、情報交換を行った。	・引き続き、認定講習や外部の研修案内を行い、研修を促進する。 ・研究授業を各学年グループで実施し、ビデオを視聴して研究協議を行う研修を実施する。部研でも、授業改善を目指した研修を行う。 ・寄宿舎指導員の先生たちが参加しやすいような研修を設定する。 ・引き続き、学校全体で取り組む研究テーマを設定して、研究を進める。
生 徒 指 導	生活指導の充実 (挨拶)	個に応じた表現方法を具体的に示し、自ら気持ちの良い挨拶を交わす生活習慣を育成する。	B	・学校生活全体の様々な機会に、児童生徒に応じた挨拶の仕方を示すことで挨拶をする児童生徒が増えた。 ・自発的に挨拶を行う児童生徒が増えるといい。 □	・学校の中だけでなく、校外でも挨拶を行うことを合わせて指導する。 ・各部ごとに、同じ意識で指導に当たれるよう、教職員での共通理解を図る。
	集団活動の充実 (人間関係)	集団や場の工夫によりコミュニケーションスキルの向上を図る。また、係活動の充実を図り、責任感や自己有用感を高める。	B	・学校行事等への参加の工夫を行い、体験活動を通して児童生徒のコミュニケーションの向上に努めた。係活動では、児童生徒に合った活動内容にすることでできることを増やし、責任感や自己有用感を高めた。 ・生徒の名前を呼び捨てにしていることがある。	・演劇鑑賞や体験学習等から、児童生徒の気持ちや行動の変化、成長過程を把握し、より豊かなコミュニケーションスキルの向上を図る。 ・保健体育委員が継続して行える役割を考えていきたい。 ・教師が日常的に「さん」付けて呼ぶよう心掛ける。
	寄宿舎生活の充実	余暇活動の充実を図ると共に外部との交流等を通して、社会参加へつなげる。	B	・eスポーツを通して、余暇時間の充実を図った。準備や片付けを協力して行い、ルールを守りながら楽しむ様子が見られた。また、月1回の外部との交流が良いコミュニケーションの場となり、社会性の向上につながった。	・他校とのeスポーツ交流を行うに伴い、事前にZoomでの交流を行ったが、対話の仕方やマナーなどの学習にもなった。子どもたちも楽しそうにしていたため、引き続き交流の機会を持ちたい。 ・eスポーツだけではなく、個に応じた余暇活動について指導員間で考えていきたい。
進 路 指 導	進路指導の充実 (キャリア教育)	進路に関する研修の実施や進路だよりなどの配布を行い、卒業後の生活が見通せる情報提供に努め、ニーズに応じた進路選択、進路実現を図る。	B	・進路懇談会や就労についての学習会を開催し、保護者に対し進路に関する情報提供に努めた。 ・進路だよりを年間4回発行し、進路についての情報提供と理解啓発に努めた。 ・市町の福祉担当課や相談支援専門員と連携し、生徒や保護者のニーズに応じた情報提供に努めた。	・引き続き進路に関する情報提供に努め、希望に応じた進路開拓を行う。
		愛顔(えがお)のえひめ特別支援学校技能検定で、3級以上取得者数50%以上を目指す。評価基準(A:50%以上、B:45%以上、C:35%以上、D:25%以上、E:25%未満)	A	・愛顔のえひめ特別支援学校技能検定で3級以上取得者は75%を達成した。1級取得者は36%で過去最高を達成した。	・キャリアトレーニングを通して技能検定の技術の向上を図り、3級以上取得者50%を引き続き目指すとともにキャリアトレーニング参加者の技能検定受検率の向上を図る。
セ ン タ ー 的 機 能	地域のセンター的機能の充実 (センター的機能・共生社会への理解啓発)	特別支援教育コーディネーターが中核となり、内部人材も活用しながら、全校体制で外部支援・相談に応じる。	B	・センター的機能は学校全体で行うことを機会あるごとに校内で啓発を行い、各課、各部署において外部支援が円滑に実施された。 ・体験入学時の対象児への直接的な指導及び保護者等への教育相談を中心に広く校内の人材活用を行った。連絡会、研修、訪問支援時の複数担当等を通して、コーディネーター間の情報共有に努めた。	・依頼先からの要請に応じた相談支援活動が行えるように、引き続き外部支援担当者の育成に努める。 ・コーディネーターを中心に、複数で相談を担当する他、事例研修の実施等具体的な対応を考える機会を設け、様々な相談内容に対応する力の育成に努める。
		学校行事等の魅力ある活動や、障がいのある児童生徒を支援する具体的な活動の様子をホームページや公開授業などで積極的に情報発信する。ホームページは、週に1つ以上ブログをアップする。	A	・アンケートの結果では、教職員は100%がB以上の評価をしている。保護者全体でも88.7%がB以上の評価をしている。保護者はどの学部も80%以上がB以上の評価をしているので、目標は達成していると思われる。	・ホームページを楽しみにしてもらっている保護者も多いので、今後できるだけ学校内の様子をアップしていく。大きな行事のアップ率が悪いので、その点は改善が必要であると思われる。
学 校 安 全	安全教育の充実 (安全・防災教育)	防災マニュアルの見直しを行い、事故の未然防止の意識や対応力を高める。災害時に備え、避難所設営のための体制づくりをし、必要な物資をそろえていく。施設・設備点検を月1回実施する。	B	・避難所設営に向けて、各課に分かれてマニュアルの確認や備蓄品の確認を行った。 ・施設・設備点検を月1回実施した。大体の教職員の方が期日までに管理場所の点検を行ってくれた。	・年度当初に、各課で避難所設営マニュアルや備蓄品の確認をする機会を設定。 ・管理責任者が期日までに安全点検を終えてもらえるように呼びかけを行っていく。
		自らの命を守る行動が主体的に行えるように、様々な事態を想定し、実践的・現実的な防災訓練を月1回程度実施する。マンネリ化しないよう工夫を凝らす。	B	・予告なしの避難訓練や搜索訓練を実施することで、普段の避難訓練とは違った緊張感で取り組めたように感じる。訓練ではあるが、災害はいつ発生するか分からないため、緊張感のある訓練ができるように計画をしていきたい。	・ショート訓練は、時間帯が固定されていることが多くなってきているため、時間帯を変更しながら実施していきたい。
	安全な環境づくり	保護者証の配付及び携帯を促すとともに、「来校者証」や「臨時保護者証」を有効に活用し、不審者対策の一助とする。	B	・「来校者証」及び「臨時保護者証」の着用をすることで、不審者対策として効果を上げた。 ・保護者証の着用率も上がっており、学校行事等での問い合わせも多く意識の向上が見られた。	・日常では、保護者の方には保護者証の携帯を呼び掛けるとともに、学校行事等の呼び掛けを継続する。 ・参加数の多い文化祭では、来校者証の配付等が難しく、回収にも不安があるため、活用方法を検討する。
そ の 他	働きがいのある職場環境の充実 (教職員の働き方)	時間外勤務は、上限を月45時間以内とする。 評価基準(A:85%以上、B:75%以上、C:70%以上、D:65%以上、E:65%未満)	A	・勤務時間外在校時間が月平均45時間以内の割合は89%であり、昨年度より8%増加した。月別では、5月が23人と最も多く、8月が0人で最も少なかった。なお、超過時間の平均は62分であり、昨年度より3分増加した。	・特定の教職員において、毎月の勤務時間外労働が長時間化している現状がある。今後は勤務時間の適正管理や見える化による意識改革をはじめ、業務量の見直しや削減を進め、健全で持続可能な労働環境の整備に取り組んでいきたい。ワーク・ライフ・バランスの実現は、教職員一人ひとりの人生を豊かにするだけでなく、教育活動の質の向上にもつながるので、保護者や地域等の理解を得ながら働き方改革に引き続き取り組んでいきたい。

※ 評価は5段階(A:十分な成果があった B:かなりの成果があった C:一応の成果があった D:あまり成果がなかった E:成果がなかった)とする。